

「スポーツ方法学研究」から「コーチング学研究」への架橋

高岡 治¹⁾

Osamu Takaoka¹⁾

はじめに

2010年4月の学会名称の変更に伴い、研究誌の名称も「スポーツ方法学研究」から「コーチング学研究」に変更された。「名は体を表す」とも言われる。ここでは「スポーツ方法学研究」において編集に携わった立場から、ここ数年の研究誌を概観し、簡単ではあるもののとりまとめをおこなうことにより「コーチング学研究」への架橋としたい。

「スポーツ方法学研究」発刊の概要

コーチング学会のホームページ (<http://www.jcoachings.jp/houhougaku/>) には、創刊号(1988)から現在までの「スポーツ方法学研究」掲載論文のタイトル、著者などが掲載されている。「スポーツ方法学研究」は創刊号から20巻(2007)までは年1回、それ以降は年2回発刊されている。21巻以降各巻の2号は日本体育学会体育方法専門分科会との連携により、専門分科会会報との合本という形で発刊している。専門分科会のご協力に感謝申し上げたい。携わった15巻1号(2002)から23巻2号(2010)までの12冊を概観すると、原著論文50編、実践研究14編、研究資料19編、調査報告1編、短報6編、シンポジウム要旨6編、編集委員会企画1編、計97編の論文が掲載されている。いずれもスポーツ方法学の領域で、バイオメカニクス的研究、運動生理学的研究、数理統計学的研究、スポーツ心理学的研究、スポーツ社会学的研究、スポーツ哲学的研究、スポーツ運動学的研究など多岐にわたる研究手法が用いられた論文群である。

編集委員会のアポリア

この間の「スポーツ方法学研究」を手にとってみると、その時々苦悩がよみがえる。委員会としては、

当然のことながら会員からの投稿論文はできるだけ速やかに掲載までこぎ着けたい。しかしスムーズに事が運ぶとは限らない。「スポーツ方法学研究」では、通常2名の審査員が査読にあたり、調整役として編集委員がこれに加わる。審査員の選出には投稿論文の研究領域と競技種目とを考慮し、それぞれを専門とする会員に依頼するが、場合によっては会員外の方に依頼することもある。お忙しいなか時間を区切った依頼であるにもかかわらず、査読にあたっていただいた審査員からは懇切丁寧にご指導賜ることが多かった。恐縮の極みである。研究領域と競技種目という異なる地平から査読が行われるので、調整に時間がかかってしまったり、場合によっては折り合いをつけられないこともある。当該競技種目における通時的・共時的な意味系と価値系に切り込んだ素晴らしい知見であるように思えても、母体科学の研究手法からすると瑕疵ありと指摘されたり、また、その逆のことも起こりえる。著者、審査員とも真摯に対応して下さるからこそ起こることなのであるが、委員会としては頭が痛い。しかし何らかの決断を下さなければならない。まさにパトス(受苦)である。著者、審査員、会員の方々にご迷惑をおかけすることになってしまったが、発刊を遅らせたことも幾度かあった。このようななか委員会と著者、審査員とのやりとりにあたっていた編集事務局の東京女子体育大学櫻田淳也先生、筑波大学中川昭先生、松元剛先生のご苦勞は察して余りある。さらには頼りない委員長を支えてくれた副委員長の国際武道大学佐藤正伸先生をはじめ編集委員の先生方には大変感謝している。この場を借りて御礼申し上げたい。そして、なによりも、せっかく投稿していただいたにもかかわらず掲載までに時間がかかってしまったり、掲載に至ることが出来なかった論文に対しては、委員長の力不足をお詫びするよりほかはない。

1) 「スポーツ方法学研究」編集委員長
鹿児島大学

「コーチング学研究」への期待

金子 (2009) は、マイネルを援用しつつ、スポーツ方法学の厳密な理論的基礎づけは動感化される感覚能力の養成や感覚論的な分析方法論を主題化したスポーツ運動学に裏打ちされなければならないことを指摘している。しかし、この間の「スポーツ方法学研究」を概観してみると「その運動はどういうものであるのか」という動きの構造や技術、戦術に関わる自然科学的な研究は多くみられるものの、「その運動はどうすればできるようになるのか」という動きの発生に関わるスポーツ運動学的見地からの研究が少ないようにみられる。確かに、課題となっている運動の構造や合理的な解決の仕方がわからなければ、何を習得すれば良いのかを特定することはできない。しかし、習得すべき内容が明らかになっても、それを身につけようとするのは人でありロボットではない。ロボットであればプログラムを作成しスイッチを入れれば動き出すのであろうが、人はそうはいかない。いくら綿密な指導方法を作成しても思うようには動きは発生してくれない。因果関係では説明しきれない領野が体育・スポーツにはあり、そこではまったく別な理論が求められている。

スポーツ方法学やコーチング学の意味内容や学領域の独自性などについて論述する力などとうてい持ち合わせていないので、その内容については諸先生方の論考に委ねざるをえないが、仮に「スポーツ方法学」という名辞が「学習手順と学習手段の伝達とその学習活動の合理的なマネージメントと監視活動、さらに励ましの教育学による学習支援」(金子, 2009) と解され、スポーツ運動学からの参入を阻んでいたのであれば誠に残念なことである。「コーチング学研究」への名称変更により、スポーツ運動学からの知見を取り込むことができるのであれば、今後の発展に期待が持て

るし、是非そうあって欲しいと思う。これは自然科学的研究と発生目的論的研究の両者を統合しようとか、どちらか一方へ収斂させることを意図しているわけではない。ヴァイツゼッカー (1996) が指摘するように、これらふたつは別々の課題を割り当てれば、いささかも排除し合うものではないし、上位での連繋の可能性さえもつ。そのためには、まずは本学会において、スポーツ運動学からの参入を受け入れる土壌を作ることが必要であろう。それにあたっては、図子 (2010) が指摘する査読システムの構築もひとつの方策なのかもしれない。「コーチング学研究」にはそのような土壌になっていただきたい。「ひとたび形成されたものも、たちどころに変形される。だから、多少とも自然の生きた直観に到達しようとするれば、われわれ自身が、この自然の示す実例そのままに形成を行えるような、動的でのびやかな状態に身をおいていなければならない」というゲーテ(2003)の眼差しは、まさに、フィールドや体育館における指導者のそれそのものであり、コーチング学において基柢に据えるべきであるように思える。

図子浩二編集委員長、青山清英編集事務局長のもと、今後の「コーチング学研究」の充実を祈念する次第である。

文 献

- ゲーテ: 前田富士男訳 (2003) ゲーテ全集14 自然科学編 形態学序説. 潮出版; 東京, p.44.
- 金子明友 (2009) スポーツ運動学. 明和出版; 東京, pp.104-110.
- ヴァイツゼッカー: 木村敏訳 (1996) 生命と主体. 人文書院; 京都, p.12.
- 図子浩二 (2010) スポーツ選手や指導者に役立つ実践の学としてのコーチング学の一つの方向性. 日本体育学会体育方法専門分科会会報, 36: 99-104.